

令和6年度第2回小櫃・上総地区公民館運営審議会会議録

- 1 会議名称 令和6年度第2回小櫃・上総地区公民館運営審議会
- 2 開催日時 令和6年9月10日(火)
14時30分から16時50分
- 3 開催場所 君津市上総公民館 多目的ホール
- 4 出席委員 【小櫃地区選出】三橋委員長、丸山委員、荒井委員
【上総地区選出】小泉副委員長、石井委員、鳥井委員
事務局 【小櫃公民館】石井館長、藤平副館長、會澤副主査、島津主事
【上総公民館】本橋館長、潤米松丘分館長、相川亀山分館長
森本副館長、早田主査、今井公民館主事、池田主事
- 5 欠席者 栗原委員、小島委員
- 6 傍聴人 なし
- 7 会議概要 下記のとおり

- 1 開会（進行 藤平副館長）
- 2 委員長あいさつ（三橋委員長）
- 3 小櫃公民館長あいさつ（石井館長）

4 議事

【三橋委員長】

それでは次第に沿って進めてまいりますので、よろしくお願いいたします。

さて本日は、報告事項が2項目、協議事項が2項目でございます。では、報告事項その1「各公民館事業の中間報告（4月から8月）」について、まず小櫃公民館から、続いて上総公民館から報告をお願いします。

なお、質疑応答につきましては、報告事項の2項目が全てが終わってから時間を設けますので、ご承知おきください。では、報告をお願いします。

【藤平副館長】

*報告資料1-1「令和6年度小櫃公民館事業中間報告（4～8月）」に基づいて説明。

【森本副館長】

*報告資料1-2「令和6年度上総公民館事業中間報告（4～8月）」に基づいて説明。

【三橋委員長】

次に、報告事項その2「文化祭について」です。日程や催しの企画等を紹介していただきます。小櫃公民館、続いて上総公民館からお願いします。

【藤平副館長】

*報告資料2-1「令和6年度小櫃地区文化祭について」に基づいて説明。

【森本副館長】

*報告資料2-2「令和6年度公民館文化祭について」に基づいて説明。

【三橋委員長】

両公民館からの報告事項が終わりましたので、質疑の時間を設けます。委員のみなさまからご意見やご質問はございませんか。

【丸山委員】

松丘分館の防災講座への参加者が39名というのは、松丘地区の自治会に対して動員をかけたのでしょうか、それとも自由参加ですか。

【森本副館長】

自由参加で、チラシ回覧をしています。参加者は自治会長会で説明させてもらい、自治会長に参加してもらって、この人数となりました。

【丸山委員】

「ゆるい動員」というイメージでしょうか。小櫃の防災講座では、自治会から2名くらい、ほかには消防団などからも参加しています。私も日赤の関係で参加したのですが、全体で57名と、それなりの人数の参加がありました。松丘分館の子どもイベントの参加人数が4～5人で少なくてもったいないと思いましたが、松丘分館の防災講座は39名と多いようでしたので、動員なのか、みんなの関心が高くて参加したのか、質問させてもらいました。君津市のLINEを登録しているといろんな情報が入ってきますが、松丘などのイベントは面白そうだな、と思っていました。最近子どもが少なく残念ですが、多すぎて参加できないのですが、4～5人のように少ないと正直寂しいなと実感しています。

それと、資料の1ページにあります。小櫃公民館青少年教育事業の「子ども会等関係者会議」の参加者が17名というのは、PTAのほかにはどなたが対象でしょうか。

【島津主事】

地区の子ども会の担当者のほか、スポーツ関係団体の代表者、青少年相談員が対象となります。

【丸山委員】

PTA会長は入っていないということですね。地区の子ども会の役員となると全ての地区ではないですね。

【島津主事】

地区によっては子ども会が解散してしまっています。ですので、子ども会がまだ残っているところの役員となります。

【丸山委員】

わかりました。

【石井委員】

亀山分館事業のチェンソー・刈払機の講習会について、私も参加したのですが、あとになって行けばよかった、という人が大勢いましたね。回覧板は回ってきても見ていない人がほとんどで、もったいないと思いました。結構役に立つお話だったので、これはいいと思いました。回覧を回しても見ている人が少ないのでしょうか。

それと、子どもキャンプについてですが、1日目の昼間は小櫃と上総は分かれて活動したということですね。夜は一緒になってキャンプファイヤーなどをして楽しく過ごしたということですね。私も小学校時代にキャンプに行ったことを今でも覚えています。確か市原の白鳥キャンプ場でした。楽しかったという記憶があります。きっと大人になっても、子どもたちは覚えていると思いますので、これからもどんどんやってもらいたいです。

最後に、小櫃公民館のモデル事業「ちょボラの会」の懇談会についてですが、小櫃公民館の建物の造りは改善をしていくにはやりやすい施設だと思います。ただ、まさかメンバーと審議委員との懇談だとは思っていませんでしたので、はじめのうちは困惑してしまいました。懇談会については、もうちょっとどういう風にやるのか教えてもらえる

とよかったです。内容を知らなかったのので、私と小島委員は少し戸惑いました。

【三橋委員長】

回覧板の話で、最近よく聞くのが、回覧板が回ると誰かが見てすぐに回してしまい、家族内で共有することが薄れてきている、ということですね。回覧板は家族みんなで情報共有したいですね。

【石井委員】

亀山分館や松丘分館のたよりなどは、各家庭で一部ずつ取るものとなっていますが、知らない人がずいぶんいます。

【鳥井委員】

上総公民館の8月2日に行なわれた地域住民交流教室の発達障がいの講演ですが、参加者としては上総の方が多かったのでしょうか。どういった方が多かったのでしょうか。

【森本副館長】

意外だったのですが、市内でも市街地の方が来ていました。

【今井公民館主事】

上総地区からの参加は2名でした。今回、市役所のLINE、メール、ホームページなど使える手段を使った結果、地区内の方が少なかったのは残念ですが、関心の高い人から申込みがありました。

【鳥井委員】

昼間の時間帯に開催されたのですか。

【今井公民館主事】

平日の午後に開催しました。

【鳥井委員】

子どもの数は減っていますが、発達障がいの子の割合は増えてきていますので、関心を持っている方も増えてきています。昼間は働いていて参加できない人もいるので、今度は夜の開催をしてもいいのかなと思います。

【三橋委員長】

ただ今、鳥井委員のご意見にもありましたが、とくに働いている方からの開催時間に対するご意見は多いです。公民館だけではありませんが、開催する側が、1回だけではなく、参加者の方にも配慮するような対応もしていけないと思います。

【荒井委員】

先ほど石井委員がおっしゃっていましたが、田舎では都会でやっているようなものを持ってきても誰も食いつかないです。チェンソーの講習会など、その地域に特化した事業・イベントをやればよいと思います。回覧板の話が出ましたが、広報活動として考え

ないといけないと思います。ほかの家族が誰も見ないうちに回してしまいがちです。私は必要なものはコピーして取っておくようにしています。

それと上総公民館の文化祭についてですが、館外部門で青葉高校とあるのですが、どこでどんなことをするのでしょうか。

【森本委員】

青葉高校に関しては、館外は職員駐車場で野菜販売ですね。館内でもロビーで花の展示をします。

【荒井委員】

その場合、駐車場はどうなるのでしょうか？

【森本副館長】

職員駐車場の場所を模擬店にしているので、一般のお客さんの駐車場では行っていません。

【荒井委員】

わかりました。

【小泉副委員長】

小櫃公民館では「ちょボラの会」の話し合いをずっと続けていますけれども、参加者の年齢層はどのくらいでしょうか。20代、30代で参加されている方はいらっしゃいますか。

【藤平副館長】

毎回3～4人と人数は多くないのですが、40～50代のメンバーが中心となっています。そのメンバーの息子さんが中学校の生徒会長をしていて、会議に来てくれたりしています。

【小泉副委員長】

ありがとうございます。

子ども事業についてですが、小櫃公民館が実施している「子ども会等関係者会議」は上総地区でも実施可能でしょうか。

【森本副館長】

現状では、青少年健全育成連絡協議会が令和4年度に設置されましたが、その中で行えるのが一つ、そのほか小櫃公民館のように単独で行うことを検討しています。

【小泉副委員長】

ありがとうございます。キャンプ以外にも小櫃と上総で、合同で取り組む事業のイメージはありますか。

【森本副館長】

今回、子どもキャンプは合同イベントとして実施しましたが、小櫃公民館とスケジューラーなど細かい調整と検討が必要になります。合同で開催している事業としては、毎年両館の高齢者学級が12月に交流会を行っています。

【今井公民館主事】

ちなみに、今回の子どもキャンプの合同実施については、両地区の青少年相談員の方々から発案があり、検討した結果、一部合同の形で実施に至った経緯があります。

【小泉副委員長】

ありがとうございます。

【三橋委員長】

子ども関係についてですが、最後に私からよろしいでしょうか。

小櫃では昔から地域で子どもたちを育てようという気運があり、夏休みには自治会単位で子どもたちを楽しませてあげようという思いがありました。ほかにも青少年相談員の子どもキャンプがありましたが、地域の中にそういう気持ちがないと成立しないと思います。現状として、小櫃の地域では昔からあったものも、子どもの数が減ってきてしまって、地域の自治会の中でどのようにそういう意識を持ってもらうかが課題となっています。子ども会等関係者会議が継続して残っているので、代表者は参加してくれますが、参加してくる地域の意識そのものが薄くなっているため、会議に出れば何か得られるものがあるのでは、と期待を持たれている状態にあります。

大事なのは、地域の中のコミュニティをどう形成していくか、子どもが減ってきているのであれば、実施主体の単位を大きくして、もっと言えば、小櫃と上総で一緒に企画するなど、変化に合わせて対応していく必要があるかと思えます。

この議題につきましては、意見も出揃ったようですので、次の協議に移ります。

全体協議の内容は、「審議テーマにおける取組・事業の報告並びに評価」についてです。改めてこれまでの動きの振り返りと、今後の流れを確認させていただきますと、小櫃・上総地区公民館運営審議会では今期の審議テーマを「地域活性の拠点としての公民館運営・事業のあり方」と設定しました。このテーマに沿って、小櫃・上総両館がそれぞれモデル事業を企画し、われわれ審議会委員が、先般その三つのモデル事業を見学し、項目ごとの評価を行ったわけです。そして3月の審議会では、今期の総仕上げとして、「意見書」をまとめるという流れになっておりますので、そこを念頭に置いてください。

それでは、(1)モデル事業への評価について、評価の概要と、両公民館がその評価をどう受け止め、分析したのかについて、小櫃公民館、上総公民館の順に報告をお願いします。

【會澤副主査】

小櫃公民館ではモデル事業として、「いきいきシニアプロジェクト」と「ふらっとホーム事業」の二つを展開していますが、外部評価のまとめとは別に、当日資料として、内部評価をまとめたものも配布させていただきました。そちらも併せてご覧いただきたいと思えます。

はじめに、「いきいきシニアプロジェクト」についてですが、内部評価を記載した本日

配布資料をご覧ください。小櫃公民館では地域の高齢者を対象として、開館当初から老人学級・高齢者学級を開催しています。現在の位置づけとしましては、アクティブシニア向けの「ほほえみ学級」と、よりマイルドな内容の「おびつスマイルサロン“いーね”」と、参加者の体力面やニーズに応じた参加機会を整備しています。

さらに今年度からはスマイルサロンから派生した「介護家族のひろば」を新規事業として実施しています。これら三つの事業展開の総体により、今後の「人生100年時代」において、30年以上の高齢期にあっても、当事者やその家族が生き生きと過ごすための学びとつながりづくりの拠点としていくのが、「いきいきシニアプロジェクト」となります。

すでに、「介護家族のひろば」につきましては6月6日に実施し、プライバシーの観点から、書面による報告をもとに評価をいただきました。

これに加えまして、8月23日に「おびつスマイルサロン“いーね”・ほほえみ学級合同企画」を実施しました。この合同企画について少し説明をさせていただきます。

当日の参加者は、39名（一般12名、ほほえみ学級16名、運営委員11名）でした。二つの事業について、「ほほえみ学級」は学級形態をとり、学級長をはじめとする学級生による運営を念頭に置きつつ担当職員が支援しています。

「おびつスマイルサロン“いーね”」は、共催団体である小櫃地区社会福祉協議会をはじめ、君津市社会福祉協議会、生活支援コーディネーター、民生委員、日赤奉仕団の有志、君津市東部地域包括支援センターが運営委員として企画運営に携わっています。今回の合同企画は、おびつスマイルサロン運営委員会から、活動の周知と参加者の拡大を図るため、「ほほえみ学級」と合同で開催してはどうかとの発案から実現したものです。

「ほほえみ学級」の年間プログラムの中に組み込んで、合同実施に至りました。

内容ですが、「おびつスマイルサロン“いーね”」のタイムスケジュールを踏襲して進めました。はじめに、日本赤十字社のYouTube動画「クロス体操」を上映し、参加者全員がイスに座って頭と体のストレッチを行いました。

次に、ちょっとためになる時間として、一他家さん志を講師に迎え、「笑って健康！落語寄席」として、落語を披露していただきました。そのあとは、おしゃべりタイムとしてテーブルごとに自由に話をする時間を設け、最後にみんなで歌を3曲歌いました。ピアノ伴奏は毎回地元の方をお願いしています。

では、別冊の外部評価のまとめをご覧ください。

●審議テーマに対して、事業の目的や課題設定は適切か

評価：平均3.88／4点中

「介護家族のひろば」に対しては、既存事業からの流れや現実の生活課題の中で設定した課題と、そこに向けた事業の目的に対しては、おおむね適切であるとの意見が多くありました。

合同企画に対しては、高齢者が集い学ぶことができるつながりづくりの場を設定することに対して、好意的な意見がありました。

●対象者の設定や周知方法は適切か

評価：平均3.63／4点中

「介護家族のひろば」に対しては、既存事業の参加者の声があったことで、すでに関心のある人が存在したこと、さらに段階的な周知が図られているとの意見もあれば、まだまだ認知度は低いという意見もありました。合同企画に対しては、学級のプログラム

に位置づけていたこともあり、参加人数がある程度確保できました。合同企画の意義の一つが周知効果にあると思います。

●目的達成に資する内容になっているか（内容の充実度）

評価：平均3.75 / 4点中

「介護家族のひろば」に対しては、難しい問題でありながらも、介護者同士が集う場をつくることで心のケアを図っていけることへの評価のほか、すぐに解決できる問題ではないのもしかりで、有意義な集まりとなるにはまだまだこれから、といった期待と課題が混ざったコメントもありました。

●講師の選定や協力者や関係者の広がりや適切か

「介護家族のひろば」に対しては、企画会議を通して関係者・機関と連携が取れていることへの評価が高く、また、講師は参加者それぞれの経験・体験の内であり、お互いの思いの共有を通して、自分に必要な情報が得られる機会となっていると評価していただきました。

●事業目的は達成されているか（参加者の反応なども踏まえて）

評価：平均3.5 / 4点中。

「介護家族のひろば」に対しても合同企画に対しても、おおむね事業目的は達成されているとの意見が多くありました。

●学習・活動の深まりや新たな活動への展開が期待できるか

評価：平均3.38 / 4点中

「介護家族のひろば」に対しては、広報や情報発信により、新たな参加者が増えることを望む声が多くありました。公民館に集まる高齢者が増え、生き生きと暮らしていくことが結果的に認知症予防となったり、認知症を受け止める地域となっていくとの評価をいただきました。

最後に、外部評価を踏まえた公民館側の内部評価についてご説明します。本日配布した資料の4～5ページをご覧ください。

まず、評価できる点としまして、「介護家族のひろば」は既存の事業の参加者の声から事業の必要性をとらえて、その上で公民館単独の企画ではなく、介護当事者も含めた関係者による企画会議と、プレ実施の経験を重ねながら丁寧に検討の時間をかけて実施に至りました。このことが、参加者の満足度の高さや外部評価における課題設定の意義として現れていると受け止めました。

当館が認知症介護という社会問題に向き合う際、周南公民館や認知症介護者ネットなどの先進事例に学びつつも、地域に住む当事者や関係者と協同しながら、介護者の集いの場を生み出していく過程そのものが、新たな気づきや学びとなりました。

今回の話題の中でも、介護をしている当事者家族が、かつての姿と程遠い現在の姿を目の当たりにしながら、徘徊による行方不明や排せつ物の処理、誤飲など、緊張状態のうちに日々の介護をしている生活実態は、高齢化率などの数字には決して表出しないものでした。

課題・改善すべき点としては、「介護家族のひろば」では当事者に情報が直接届くよう、民生委員やケアマネジャーなどを通じて案内をしてもらいましたが、どこまで事業の認知度を高められたか、それを推し量る手立てがないというのが現状です。

一方で、事業の趣旨を踏まえるならば、少人数でゆっくりと語る時間を設けることが必要であり、事業の適正規模を考慮した周知方法の工夫は、引き続き必要であると考え

ます。

また、「認知症介護」という暮らしの課題において、問題を深刻化させてしまう要素として、男性の家事スキルの低さやご近所との関係、とくに他所から移り住んだ人に顕著のようですが、老々介護、金銭的負担などが今回の話題から確認することができ、これらは今後の公民館事業立案においても考慮すべき点ではないかと思われま。

合同企画の評価できる点としては、事業単独で開催するよりも、類似した対象者を持つ事業同士が合同開催することで、参加者の健康状態や関心に寄り添いつつ、個々の状況によって、学びや集いのステージをシフトしたり、それぞれ参加していくための周知の機会となった、ということです。例えば公民館など、家の外に出かける機会が増えていくことで会話と学びが生まれ、結果的に認知症予防にもつながっていくことも期待できます。

総評に関しては、次のように受け止めました。まず、介護者などの当事者が地域で孤立化することを回避し、福祉などの既存団体も形骸化やメンバーの固定化による先細りを防ぎつつ、地域が活性化していくためには、関係者に呼びかけ、対話を通じてお互いが持つ情報やスキルをうまくミックスしながら共有していく場が必要です。その役割において、地域の公民館は適任であると考えられます。

また、高齢期になってから公民館に足を運ぶのではなく、かつて小櫃公民館がそうであったように、若い世代のうちから興味・関心のある事業に関わりを持っていけるように、様々なジャンルを仕かけていくことで、結果的にこの地域で生き生きと暮らしていけるようなつながりを生み出せるようになるのでは、と考えます。そのために、住民の生活実態を調べ、ターゲットを絞り、当事者や関係者とともに、学びやイベントの機会を生み出していく必要があると思います。

次に、「ふらっとホーム事業」についてこちらも、本日配布の資料と外部評価のまとめをそれぞれ見ていただきたいと思います。

まず、外部評価のまとめについてです。

●審議テーマに関して、事業の目的や課題設定は適切か

評価：平均3.83 / 4点中

施設の再整備のタイミングやアンケート結果から見えてきた施設の現状を踏まえて、ボランティア活動として住民・利用者とともに「快善」活動を行うことへの評価が高かったと思います。

●対象者の設定や周知方法は適切か

評価：平均3.17 / 4点中

ボランティア活動へのすそ野の広がりに対して、まだまだ周知が足りていないとの評価かと思ひます。また、小学校高学年から高校生にも発信してはどうかとの提案もいただきました。

●目的達成に資する内容になっているか（内容の充実度）

評価：平均3.67 / 4点中

出されたアイデアを可能なところからすぐに生かしていく取り組みへの評価が高く、これらの活動が公民館を住民自ら利用しやすい施設につくりあげていく可能性を含んでいるとのご意見もいただきました。

●講師の選定や協力者・関係者の広がり

評価：平均3.0 / 4点中

現状の活動メンバーが固有の団体メンバーを、今後どう広げていくかという課題面も含めた評価だったと思います。

●事業目的は達成されているか（参加者の反応などを踏まえて）

評価：平均2.8点／4点中

ここが最も低かった理由として、事業目的の達成をどこで判断するか難しい点にあるかと思います。施設の「快善」は時代に応じて変わっていくものであり、完結することがない、という点でいえば、評価しにくい観点だったかと思います。それでも始まったばかりの本事業に対して期待を寄せていただく声もいただきました。

●学習・活動の深まりや新たな活動への展開が期待できるか

評価：平均3.5／4点中

活動の周知や関係者の広がり、多様な声の拾い方など様々なご意見をいただきました。

最後に、外部評価を踏まえた公民館側の内部評価についてご説明します。本日配布の資料、4～5ページをご覧ください。

まず、評価できる点としまして、本来、公民館施設の管理は職員が利用者の便を図って施設の改善に努めていくもので、その業務を放棄しているわけではないという前提の上で、利用者・住民の視点で、自ら楽しみつつ公民館の空間を「快善」していくことは、現在の施設再整備の時期において、地域の公民館としてのあり方や運営方法を、利用者・住民目線で見出していく上での貴重な手がかりとなります。「ちょボラの会」メンバーにとっても、意見がすぐに形になって表れていく達成感とともに、当事者意識をもって公民館施設を考える機会につながっています。

また、このような空間づくりや運営方法の「快善」を進めていくにあたり、「場を整える」だけにとどまらず、例えば、子ども事業の「こどもひろば」において夏休みのゲーム大会へと発展させながら、小学生の参加者もボランティアの中高生も、ボードゲームに触れ、その楽しさを味わう機会をつくりました。

さらに、今年も連日酷暑が続きましたが、ふらっとカフェの一環で、かき氷を提供することで、子どもも大人も涼を味わいながら公民館のイメージアップを図ることができました。

課題・改善すべき点として、「ちょボラの会」のメンバーは、公民館再整備ワークショップの参加者から一本釣りの形で声かけを行い、図書コーナー設置の流れでメンバーが関係するグループ（ブックママ）で輪を広げていますが、「ちょこっとボランティア」の名称にあるように、活動内容に応じて関係者へ細やかに声かけをしていきながら、負担感を減じつつ関係者を広げていく必要があります。

また、今後、公民館を利用する層が移り変わることや、世代交代も視野に入れ、子どもや若い世代に関わってもらえるような仕かけ・声かけが必要であるとも認識しています。

総評に関しては次のように受け止めました。まず、活動に対する広報や関わるボランティアの広げ方について、既存の回覧板等の情報伝達方法だけでなく、例えば、宮城県白石市の若者会議の事例のように、大人を除いた学生だけの意見交換の場（カフェやサロンの空間）を設けるなどしつつ、アイデアから次への行動が生まれる仕かけ（いわゆる対話型ワークショップ）が必要です。

今回、「用がなくとも来られる／来たいと思える公民館」を起点に取り組み始めた事業ですが、「ちょこっとボランティア」という緩やかなつながりによって、行動意欲の根本であるワクワク感や楽しさ・やりがい、といったものを刺激し、結果として「用が生ま

れる公民館」となっていくことが期待できます。

その点で、今回の外部評価にも取り入れてみましたが、「ふらっとホーム事業」については、「PDC Aサイクル」よりも、もっと柔軟に対応するための「AARサイクル」(Anticipation:見通し→Action:行動→Reflection:振り返り)によって、楽しみながら挑戦し修正・改善を繰り返していく、失敗を恐れず楽しく前向きに取り組んでいくことを重視したいと考えています。

小櫃公民館からは以上です。

【三橋委員長】

続きまして、上総公民館お願いします。

【森本副館長】

資料説明に入る前に、改めて簡単にですが事業の説明、経過等について報告します。

令和5年度・6年度の公民館運営審議会審議テーマに沿い、令和5年度に行ったアンケート結果や上総地域の人口構成や地域特性なども踏まえ、健康、食という部分に着目し、上総公民館のモデル事業として「みんなイキイキ！食の健康教室」を令和6年7月2日、7月30日の2日間、実施しました。

7月2日の第1回目は、地域の大人世代を対象に、保健師や管理栄養士に講義をしていただき、高血圧が起こる仕組みや日常生活でできる予防・改善の方法について学びました。7月30日の第2回目は第1回目で学んだ大人の方が、子どもや孫と一緒に、調理実習として、タコライスをつくりました。減塩、健康について考えながら実習し、世代間で交流する機会となりました。参加者は4組9名で、祖母とそのお孫さんに参加をしていただきました。

委員の皆様には、当事業の評価依頼を8月5日にさせていただき、委員のみなさまからの評価は8月の下旬までには、全ていただいたところです。

●審議テーマに対し、事業の目的や課題設定は適切か

評価：平均3.13 / 4点中

「高血圧の知識について、非常にわかりやすい説明であった」「上総地区は高血圧の人が多く、健康をテーマにした要望が多かったこともあり、ニーズに合っているもので適切であった」などの意見をいただきました。

一方で、「テーマに対する企画はよいが、参加の応募者が少なく、事業の企画としては公民館と地域住民のつながりや意識にギャップがあるのではないか」という意見や「テーマ自体が個人に対しての課題となり少し狭いものになるのではないか」などの意見もいただきました。

上総公民館としては、昨年度実施したアンケートの結果や上総地区に高血圧の人が多くいることを踏まえて、食を通じて高血圧について関心を高めてもらい、人が元気で、健康で、というところにスポットを当てて、永続的、継続的な部分で少しずつでも、地域活性、改善が図れば、というテーマ自体は適切だと考えますが、一人ひとりの健康づくりが地域の活性につながるという道筋を、うまくつけられないままの事業実施となってしまった部分はあると考えます。

●対象者の設定や周知方法は適切か

評価：平均3.25 / 4点中

対象については「対象者個人のみならず、家族単位で高血圧や健康に関することを興味や話題になりやすい点」、周知については「回覧や学校へのチラシ配布、メールやLINEでの配信など幅広く行いよかったのではないかな」などの意見をいただきました。

一方で、「一般からの参加者募集が難しく、参加者が少なくなることは想定されたこと」、「講師やスタッフの人選とあわせて、地域の関係者や関係団体にも発信し、参加を促すための連携を図ればよかったのではないかな」などの意見もいただきました。

上総公民館としては、対象者の設定は適切であったと考えますが、平日の開催であったことや、2回セットでの参加であったため、仕事を持つ保護者には参加しづらかった部分がありました。周知については、実際の参加者は全員が声かけでしたが、自治会回覧、君津市公式LINE、君津市メール配信サービス、上総小学校でのチラシ配布、他事業参加者等への声かけを行っており、周知方法は取りうる手段を全て取ったと考えております。

●目標達成に資する内容になっているか（内容の充実度）

評価：平均3.63 / 4点中

「2回に分けて行われており内容は十分」、「『健康』→『食』→『高血圧』とテーマを関連づけして、講座で解説した上で、食生活改善推進員との協力で各家庭で営まれる調理を実習した事業の構成は整っていたと思う」などの意見をいただきました。一方で、「調理塩分摂取量を意識した調理のため、それを補う調味料が多く使われていたので高血圧撲滅の目的には合うだろうが、日常生活で同様にできるかが疑問」。

また、「公民館の一つの事業としてはよいと思うが、『地域活性』という大きなものになると、少し物足りなさを感じる。もっと多くの参加者が欲しいところ」という意見もいただきました。

上総公民館としては、第1回目に大人を対象に座学の講座を行い、第2回目では世代をこえて家族ぐるみで減塩に取り組むために、食生活に関する講座を聞いた上で、子どもでも簡単につくることのできるタコライスを孫と祖母で調理し、家庭で減塩への意識付けとともに、孫と祖母の交流も深めることができ、目的達成に資する内容になっていたと考えます。

●講師の選定や協力者・関係者の広がり適切か

評価：平均3.5 / 4点中

講師の選定については、1回目の保健師、管理栄養士、2回目の食生活改善推進員ともに、それぞれの立場で講座、実習をしており、よかったとの声が多くありました。

上総公民館としては、第1回目は高齢者支援課の保健師及び管理栄養士、第2回目は君津市食生活改善推進員と、いずれも食と健康の関わりについて専門的な知見を持つ方々に指導を依頼し、講師の選定については適切だったと考えます。

また、関係者の広がりという部分については、当公民館としては、第1・2回の講師との関係づくりができたので、今後、他の事業を行う際にも生きてくると考えております。

●事業目的は達成しているか（参加者の反応など踏まえて）

評価：平均3.5 / 4点中

参加者の当日の参加者の様子や満足度調査アンケートからは、かなり塩分量を意識しており、また、アンケート結果も高いことから一定の目的は達成しているという意見をいただきました。一方で、「審議テーマに対しての事業と考えると少し不足しているのではないかな」という意見をいただきました。

上総公民館としては、本事業単体では、参加者の満足度が高く、「世代をこえて講座と実習を通じて高血圧について学習する」という目的が達成されたと考えますが、一方で、「地域活性」に資する公民館事業というところで考えると、参加者が想定より少なかったという部分もあり、まだ不十分だと認識しております。

●学習・活動の深まりや新たな活動への展開が期待できるか

評価：平均3.25 / 4点中

高血圧以外に「糖尿病など、他の病気を患うことなどで更なる展開ができるのではないか」「地域にある要素を関連づけていければ、新たな活動への展開が期待できる」「大人の2回参加の条件は少しハードルが高いこと」などの意見をいただきました。

上総公民館としては、今回は食と高血圧をセットにした内容でしたが、健康に関するほかのテーマを取り上げることで、今後のさらなる事業展開ができると感じております。

全般的には、「地域活性」というテーマに対して、想定より参加者が少なかったという部分は、こちらとしても事業の進め方や、2回連続とした点、孫・子と一緒に参加とした点など、これらを含めて考えていかなければいけない課題として感じております。しかしながら、データとしても、上総地区は生活習慣病の高血圧などの割合が高いという事実がありますことから、地域の方が健康で生き生きと暮らし続けられることが、ひいては「地域活性」につながるという根幹の部分でもあると思っております。

もちろん、地域の文化祭など、イベントで地域活性していくということも公民館の重要な役割としてありますが、先ほど説明した根幹の部分についても、今後も個別の事業などで、公民館として盛り上げていければと考えております。

今回の事業だけでは難しい部分もありましたが、ある程度テーマに対して認知を上げるために、継続してやっていければ根幹の部分のところで理解していただけるのかなと考えております。上総公民館の説明は以上です。

【三橋委員長】

評価の概要と分析について両公民館から報告をいただきましたので、委員のみなさまから意見を伺いたいと思います。

確認ですが、説明の中にもありましたけれども、審議テーマが「地域活性の拠点としての公民館運営・事業のあり方」です。

今回、私たちが審議をするテーマに対して、まずは事業の目的や課題設定が適切かどうかを基点に置いていただき、本日意見をいただきたいのは、講師の選定や運営や参加者の多い少ないといった事業の細かい部分ではなく、公民館が地域の拠点となっていく上で、運営やモデル事業がどうあったらいいか、拠点となりうる方向性がどうあるべきか、という観点から意見をいただきたいです。私たちが個々に行なった評価を各公民館から報告があったように、公民館の内部評価を踏まえて整理していきながら最終的に意見書としてまとめていく予定です。事業自体が活性化につながるかどうか、改めて意見をいただきたいです。

まず、見通し・評価における事業の目的や課題設定について、ご意見を申し上げます。

【石井委員】

まず、小櫃公民館の「ふらっとホーム事業」ですが、これについては範囲が広いのですが、「用がなくても来られる・来たいと思える公民館」これが前提ですよね。今、みなさん用がないと公民館に来てはいけないと思っている人が多いと思います。コミセンの

話ですが、ある人がコミセンに、「ここに来ていいんですね」と恐る恐る来ていました。誰が来てもいいんだよ、ということをもっと広く周知できればいいのかなと思います。

それと、小櫃公民館のロビーにはゲームが置いてありましたが、それで遊ぶ人はいらっしゃいましたか。

【藤平副館長】

市民センターにたまたま用があって来た家族が、図書コーナーに立ち寄ったり、ゲームを楽しんでいる場面はありました。

【石井委員】

どの事業もそうなんです、ずっと人が増えてできればいいよねというものばかりです。3点・4点のよい評価の声だけでなく、2点の評価の声について、どんなことが足りなかったのか考えてもらえるといいなと思います。

小櫃公民館の「いきいきシニアプロジェクト」では、生き生きとしたやりとりをしていました。私の知っている方もいて、参加された方も笑顔でした。

上総公民館の「食の健康教室」は二つに分けて実施してはどうかと思いました。せっかく市の職員が来て講習をしてくれているなら、もっと広い範囲でやって、それとは別にお孫さんと一緒に食事づくりを行ってもよいのでは、と思いました。私はけっこう勉強になりましたし、いい話だからこそ、もっと多くの方に聞いてもらいたいと思いました。

【荒井委員】

上総公民館も小櫃公民館も、それぞれの企画は素晴らしいと思いました。上総公民館の1日目の講義は4名と少なかつたとのことでしたが、先ほど委員長がおっしゃったとおり、継続は力なりですので、今後も続けてもらいたいです。今回は初めてなので、いろいろ試行錯誤したかと思いますが、広報も周知徹底して素晴らしいと思います。私も2日目の方だけ見学させてもらいましたが、タコライスをごちそうになり、大変美味しかったです。小櫃公民館の「スマイルサロン“いーね”」のように、他のサークルを巻き込んでやる多角的な取り組みは、事情がゆるせば盛り上がるし、公民館とは何ぞやということにもつながっていくと思います。企画自体はどれも素晴らしい。続けていくことは大変ですが、頑張ってもらいたいです。

【鳥井委員】

「地域活性の拠点」はなかなか深いテーマです。コミュニケーションを取るのにインターネットを使う子ども世代、それらを使わない大人の世代がそれぞれいる中、自治会単位で祭りを行うところもあるようですが、自治会の方が、子どものことをよく知る学校などの声を参考に、継続していくことが一番大事だと思います。ゴールはなかなか見えづらいものだと思いますが、AARで繰り返していくことでテーマに近づいていくヒントになると思います。私たちも見聞きしたことをお伝えさせていただきながら、今後も協力をしていければと思います。

【丸山委員】

評価票で伝えたとおりなんです、健康・減塩は生活習慣なので、習慣を変えるのは

意識と継続が大切です。公民館事業は基本的に平日の昼間、というイメージがあります。先ほど、事業をいつやっていたんですか、という話がありましたように、昼間行きたくても行けない人が大半で、夜の開催となると高齢者は参加できないので、昼の部・夜の部など、いろいろな角度で開催していくことが今後の課題かと思えます。

上総のモデル事業に個人的に参加しましたが、座学と調理のセットで2回の参加、というのは条件的には厳しいと思えました。調理実習には子どもや孫を連れて行けないと参加できない、というのも難しいですね。

私は公運審のほか、生活支援コーディネーターもしていて、小櫃出身で公民館には小さい頃から馴染みがあり、公民館に対してハードルが低くて十分楽しませてもらっていますし、身近な生活の場として活用しています。孫も公民館には行きたいと言いますし、小櫃公民館の講堂で、バドミントンなどで3時間ぐらい遊ばせてもらいました。ちょうど図書コーナーやボードゲームも楽しんでいて、子どもたちは「また来たい」と言っていました。上総公民館も児童室がありますが、こういういいスペースがあるんですよ、とみなさんに伝えたいです。上手くピーアールできればいいと思います。

また、小櫃公民館の茶室に授乳スペースができたと伺ったので、その様子を見てきました。小さい子が遊べるおもちゃも備えられていて、いつでも来て下さいと工夫はされているのですが、まだうまくアピールできていないのが残念です。

「ちょボラの会」の方のアンケートに、「私自身やれることは協力していきたい」という声があったのは嬉しかったです。小さいながらも団体ができて、公民館が居場所として子どもを連れてこられるようになればと期待しています。

私の母に、いつかは公民館がなくなるかもよ、と話をしたことがありますが、母は公民館には行かないのですが、「公民館がなくなるのは困る」と言っていました。

【小泉副委員長】

上総公民館の方は、今回の事業だけで評価するのは難しいです。今回、高血圧がテーマだったので、次は糖尿病など、やっていく中で拠点としての成果が上がっていくと思えました。レシピが身近なものではなく、家では試せませんでした。いろいろな種類の調味料は準備できないので、家ですぐにできることを考えてもらいたいです。資料のチラシの中に「おにぎらず」があったので、そちらの方がよかったと思えました。今、調理動画もたくさんアップされていて、三つの材料でできるスピード料理など出ていますから、そういうところも踏まえて考えてもらいたいです。

小櫃の「おびつスマイルサロン“いーね”」にも8月に参加させてもらいましたが、体操もあり落語もありで楽しかったです。会場に、東部地域包括支援センターの方もいたりして、その場ですぐに相談できるのはいいことだと思えました。わざわざそこに行かなくても、相談できる場をつくってくれるのはよかったと思います。

【三橋委員長】

小櫃の特徴の一つかと思えますが、変化を望まないというか、今までこれでやってきたんだからこれでいい、という意識が強いです。小櫃に20年、30年住んでいる方の中にも、小櫃に来た当初は村八分のような雰囲気だった、と話す方もいますし、最近移り住んだ方でも、地域の中に入りづらい、公民館にも行きづらいという印象を持つ方がいるようです。今後、公民館が建て替えになったり、新しい事業を運営する中で、「ちょボラの会」のように、自分たちの手で公民館を運営していく担い手と、今まで小櫃に住

んでいた人たちがつながって、古い考え方から脱却して時間をかけて小櫃公民館が一つの拠点となっていくのでは、と期待を抱きつつ思いました。

また、小櫃のなかで地域を担ってきた人が家庭の中で介護など、最後にまた公民館に頼る機会が必要になってきた、この時代に公民館が一つの拠点になろうとしている、というところも見えてきました。そういうところも事業に反映させて、その時々に対象者も違いますが、それを意識してやれると、公民館がみんなから頼られるのではないかと思います。

上総公民館の場合、久留里のまちなかにはいろいろなものが詰まっています。「健康」をテーマにしているので、食品の関係でいえば、酒屋、薬局、開業医など、つながるものはたくさんあると思います。職員が汗をかいて、地域の人とつなげていく役割を公民館が担う。回覧で参加者を募るだけでなく、地域の人に関わってもらい骨を折ってもらえば、もっと広がりができるのではないかと思います。公民館も身近な場所にあるので、その利点も活かせるのではないかと思います。

委員のみなさんから追加して何かありますか？

【丸山委員】

評価票は小櫃・上総独自のものですか。それとも君津市全体のものですか。

【藤平副館長】

小櫃・上総独自のものです。

【丸山委員】

確認ですが、評価項目の「講師の選定や協力者・関係者の広がりや適切か」についての質問の意図がよくわかりませんでした。何を評価したらよかったですのでしょうか？

【會澤副主査】

今回、私の方で評価票を作成しましたが、本来、公民館事業は、職員が机上でネットを見ながらつくるものではありません。本来、住民の生活実態に即して、地域の状況と照らしてつくりながら、講師も協力者もその土地に根づいていることが大事です。講師をどこからか引っ張ってきました、関係者・協力者いません、参加者が来ましたが講座が終わって帰りました、というのは公民館事業なのだろうか。その事業が実施されまでに何が起きたのか、どういう経緯でその事業が生まれ、参加者がどのようにつながり、講師や協力者（上総公民館で言えば食生活改善推進員、小櫃公民館で言えばスマイルサロン運営委員）も含めて、一つの学びの空間の中に、いろいろな立場の人がいて一緒につくっていく。講座があって終わりではなく、その前の流れ、講座の後の展開として、わかりやすいところでは、趣味教養講座のあとにサークルが立ち上がるといった例がわかりやすいかと思います。

参加する人をどう広げていくかというときに、いわゆる一般の参加者だけでなく、関係者を含めて広げていく。子どもキャンプでいうと、参加者の子どもと関係者である青少年相談員と一緒にやることで、子どもと相談員との関わりがあるように、点と点で行なっているのではなく、面的な広がりがあるかどうかところを見ていただきたかったです。その部分をきちんと説明できていなかったのは申し訳なかったですが、意図としては、人を呼んで場をつくって終わり、ということではないということです。

【三橋委員長】

公民館が立ち上がりの頃は、公民館側が講師を選んできて実施してきましたが、だんだん事業に広がりが出てきて、自分たちでやろうという考えが広まり、現在は関係者を広げながら展開していくことを大事にしている点を評価できればということかと思えます。先ほど「食の健康教室」について私が話したように、事業を展開するときに、公民館職員は地域の人をつなぎ合わせていき、地域のみなさんが参加し、地域側として公民館側の動きの中でつながりを見させてもらうということかと思えます。

【石井委員】

しいて言えば「講師の選定」が一つ、あとは「協力者・関係者」が別々にあります。講師については簡単に書けるのですが、協力者・関係者については「ちょボラ」でいうと書きやすいと思えました。今後も評価票を使うのであれば改善してもらいたいです。

【三橋委員長】

評価する側からももう少しわかりやすく質問項目を工夫していただければと思います。

【丸山委員】

オンラインで回答できるのはありがたいです。書いたり消したりせずに済むし、持っていかなくてよかったのは画期的でした。感謝しています。

【藤平副館長】

ありがとうございました。様々な意見を伺いまして、キーワードとして、周知活動や実施時間の工夫、浸透するまで継続することの大切さをご意見からつかみとることができました。人と人とのつながりを化学変化のような形で、事業を行なうこと自体が目的ではなく、あくまで手段として、その後どのようなものが生まれるのかということ公民館は意識して行なっていくことが大事だと感じました。

【三橋委員長】

ほかにいかがでしょうか。

ないようでしたら本日の審議はこれにて終了いたします。次回の審議会では、本日の協議内容をもとに、両館がまとめた意見書（案）を協議する予定となっておりますが、もし、この場で伝えきれなかったご意見などあるようでしたら、それぞれの公民館へ寄せていただければと思います。

それでは、事務局に進行をお返しします。